



岩波文庫

30-007-1

竹取物語

阪倉篤義校訂

岩波書店

竹取物語

1970年8月17日 第1刷発行 ©

1980年6月20日 第13刷発行

¥ 100

校訂者 さか 阪 くら 倉 あつ 篤 よし 義

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式 岩波書店
 会社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩 波 文 庫

30-007-1

竹 取 物 語

阪倉篤義校訂



岩 波 書 店

目次

凡例	五
一 かぐや姫の生ひ立ち	九
二 貴公子たちの求婚	一〇
三 仏の御石の鉢(石つくりの皇子の話)	一五
四 蓬萊の玉の枝(くらもちの皇子の話)	一七
五 火鼠の皮衣(あべの右大臣の話)	二四
六 龍の頸の玉(大伴の大納言の話)	二九
七 燕の子安貝(いそのかみの中納言の話)	三五
八 御門の求婚	四〇
九 かぐや姫の昇天	四五
十 ふじの山(むすび)	五五

補注・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五七

付録

『今昔物語集』卷三十一所載「竹取翁、見付けし女の児を養へる語」・・・・六九

『海道記』所載「竹取説話」・・・・・・・・・・七二

解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・七五

凡 例

一 本書の底本には、流布本系統に属し、現存の伝本のうち書写年代の明らかな最古の完本と目される「武藤本」を採り、その書入訂正をも参看して本文を定め、これに可能な限り従うことに努めた。ただし、明らかに誤字・脱字・衍字と認められるものについては、同系統本の「島原本」「蓬左本」その他、および異系統の古本などを参照して、少なくとも他の二本以上に一致して存する形によって訂したが、その場合も底本のかたちを脚注に示した。

一 問題のない語に限り、底本の「かな」を漢字に改めたが、その場合は、底本の「かな」を「ふりがな」として残した。底本にもとから存する「ふりがな」はへゝに包んで示し、校注者の付した「ふりがな」は（ ）に包んだ。また、校注者において、読みやすさのために、ところどころ「送りがな」を補ったところがあるが、これも（ ）をもって包んだ。ただし、用言の連用形終止形などで、誤読のおそれのない場合には、いちいち「送りがな」を付さない。

一 「かなづかい」は底本のままとし、「歴史的かなづかい」を（ ）に包んで傍記した（ただし、底本にもとから存する「ふりがな」や漢字を宛てた部分には歴史的かなづかいを傍記しない）。

また、句読点や、会話を示す「」（会話文中の引用は「」を施し、濁点を付したが、これらはすべて、いちいち注しない。清濁は、作品成立時代の発音と推定されるところに従う。

- 一 底本における反復記号はできる限りそのままに存する方針をとったが、ただ次の場合はこれを用いない。

漢字に改めた場合。（例、きゝて―聞^ききて）

現代の慣用に反していて読みにくい場合。（例、おやのゝ給ふ―親^{おや}のの給ふ）

- 一 見だしはすべて校注者の付したものである。

- 一 紙面の都合上脚注に収め得なかった語句の解説、ならびに考証にわたることは、補注として巻末に一括し、脚注に、それぞれ補注を参照すべきことを示した。

- 一 『今昔物語集』卷三十一所載「竹取翁見付女児養語」および『海道記』所載の「竹取説話」は、参考のため付録として添えたものである。

竹
取
物
語

一 かぐや姫の生ひ立ち

いまは昔、竹取の翁といふもの有けり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給べき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて來ぬ。妻の女にあづけて養はす。うつくしき事かぎりなし。いとおさなければ籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔てゝよごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁やうく豊になり

- 一 それは昔のことですが。
 ↓補注一
 二 分け入って。
 三 古本「さるき」。類従本「さぬき」。
 四 底本「ありけり」。
 五 可愛い状態(様子)で座をしめていた。
 六 子に籠(こ)を懸けた洒落。
 七 底本「いへゝ」の「へゝ」を消し「へ」と傍書。
 八 「女」は、諸注「おうな(嬬)」とする。
 九 籠に入れて養った。↓
 補注二
 二 底本「竹とりに」。
 二 竹の節と節との間の空洞の部分。

行。

この兒、養ふ程に、すく／＼と大きになりまさる。三月ばかりになる程によき程なる人に成(り)ぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この兒のかたちけうらなる事世になく、屋のうちは暗き所なく光り満ちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ、腹立たしきことも慰みけり。翁、竹を取る事久しくなりぬ。いきおひ猛の者に成(り)にけり。この子いと大きに成(り)ぬれば、名を、三室戸齋部のあきたをよびて、つけさす。あきた、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。この程三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。おとこはうけきらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

二 貴公子たちの求婚

- 一 成長の異常な速さは筍の生育を匂わすが、また説話の一つの型でもある(例、一寸法師)。
- 二 女子十二、三歳になると、成人の儀式として、おかつば頭を結い上げて、後に垂らすこと。
- 三 「左右して」で、手配しての意か。
- 四 女子十三、四歳に達すると裳を着ける儀式を行なう。
- 五 囲いのたれぎぬ。
- 六 華麗な美しさを言う。
- 七 三室戸は京都府宇治市の地名、齋部は姓、あきたは名か。
- 八 「なよ竹」は、しなやかな竹で、姫の姿を形容して枕詞的修飾語とする。
- 九 「かぐや姫」は、光りかがやく意の名。↓補注三
- 九 「うちあげ」は酒宴をしての意。「うたげ(宴)」の語源。「あそぶ」は歌舞などして楽しんだこと。
- 一〇 男は誰彼の差別なく、

世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見
てしがなと、を^(お)とに聞きめで、惑^{まど}ふ。その邊りの墻にも、家の^三とにも、
を^三る人だにたはやすく見るまじき物を、夜^よるは安^{やす}きいも寝^ねず、闇^{やみ}の夜に
出^でて、穴^{あな}をくじり、か^{二四(い)}ひばみ、惑^{まど}ひあへり。さる時よりなむ「よ^{二五}ばひ」
とは言^いひける。

人^{一六(お)}のをともせぬ所に惑^{まど}ひありけども、なにの驗^{しるし}あるべくも見^みえず。家
の人どもに物をだに言^いはんとて、言^いひかゝれども、ことゝもせず。あた
りを離^{はな}れぬ君^{たち}達、夜をあかし、日をくらす、多^{おほ}かり。を^{一七(お)}ろかなる人は、
「ようなきありきは、よしなかりけり」とて、來^こず成^{なり}(り)にけり。

其中^{一八}になを言^{(ほ)い}ひけるは、色^{いろ}好みといはるゝかぎり五人、思^{おも}ひやむ時^(とき)な
く夜^{よる}晝^{ひる}來^きける、その名ども、石^{いし}つくりの御^み子・くらもちの皇^み子・右大臣
あべのみむらじ・大納言^{一八}大伴^(おほとも)のみゆき・中納言^{一九}いそのかみのまろたり、
此人^{おほ}々なりけり。世中^よに多^{おほ}かる人をだに、すこしもかたちよしと聞^ききて
は、見^みまほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見^みまほしうて物^{もの}も食^く

の意か。↓補注四

二 仏典より出た語で、世間・世の中の意。

三 家の戸口のところに。「まとひあへり」につづく。

三 「をる人だに」に見るまじき物を」は插入句。家人だつて容易に姫の姿は見られないのに。

四 「かいまみ」に同じ。覗き見して。

五 「よばひ(求婚)」は、もと「呼ばふ」の名詞形。それを「夜這ひ」に言い懸けた洒落。

六 物音もしない所。底本「物ともせぬ」。↓補注五

七 姫に対する気持の深くない人。

八 底本「あるき」、「り」と傍書。

九 古本・加賀本・蓬左本など「きけり」。

三 これらは實在の人名によるか。↓補注六

はず思ひつゝ、かの家に行きてたゞずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれど、返事せず。わび歌など書きておこすれども、かひなしと思へど、霜月^(しもつき)しはすの降り凍り^(こほ)、みな月の照りはたたくにも、障らず來たり。この人々、ある時は竹取を呼び出て「娘を吾にたべ」と、ふし拜み、手をすりのたまへど「をのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日すぐす。かゝれば、この人々、家に歸りて物を思ひ、祈をし、願を立つ。思(ひ)やむべくもあらず。「さりとも、つゐに男あはせざらむやは」と思ひて、頼みをかけたり。あながちに心ざし見えありく。

これを見つけて、翁、かぐや姫に言ふやう「我子の佛、變化の人と申ながら、こゝら大きさまで養ひたてまつる志をろかならず。翁の申さん事は聞き給ひてむや」と言へば、かぐや姫「なにごとをか、のたまはん事は、うけたまはらざらむ。變化の物にて侍(り)けん身とも知らず、親とこそ思(ひ)たてまつれ」と言ふ。翁「うれしくも、のたまふ物かな」

一 「たゞずむ」は、うろろ歩き立ち留ること。底本「ありけれど」。

二 想いの苦しさを詠んだ歌。「おこすれども」の下に省略がある。

三 真夏の、日が照りつけ、雷鳴とどろくのに平気でやつて來た。

四 「たべ」は「たぶ」の命令形。たまえ。

五 私自身の生んだ子でないので、思い通りにもらないのです。

六 男と結婚させないことがあろうか。

七 わざと志のある所を見せあるく。

八 わが子を特に大切なものとして、親しんで呼びかける語。あがほとけ。

九 人間以外のものが人間の姿で現われたもの。仏典の語。

一〇 「こゝら」は量の多いこと。こんな大きさまで育てて申した私の志は一通り

と言ふ。「翁、年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、おとこは女にあふことをす、女は男にあふ事をす。その後なむ門ひろくもなり侍る。いかでか、さることなくてはおはせん」。かぐや姫のいはく「なむでう、さることか、し侍らん」と言へば、「變化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし。この人々の年月をへて、かうのみいましつゝのたまふことを、思ひ定めて、一人一人にあひたてまつり給ひね」と言へば、かぐや姫のいはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを、と思ふばかり也。世のかしき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしと思ふ。翁いはく、「思ひのごとくも、のたまふ物かな。そもくいかやうなる心ざしあらん人にか、あはむと思ふ。かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ」。かぐや姫のいはく、「なにばかりの深きを見んと言はむ。いさゝかの事也。人の心ざし等しかん也。いかでか、中に劣り優りは知らむ。五人の中に、

でありません。

二 一族も多く、家も栄えるようになります。

三 「なんでふ」は「どうして」の意で、反語になる。

「さること」は結婚。

三三 「かうても」は「かくても」。かうしてもいらつしやれましようよ。しかし。

三四 こうしておこしになつては申し入れなざることを、よく判断して、どなたか一人にお逢い申しあげなさいな。

三五 「かたちなるを」の意。(私は)美しくもない容貌なのに。

三六 浮ついた気持が起つて、うっかり結婚したら。

三七 貴い人。

三八 私の思い通りにおつしやることですなあ。

三九 底本「おろかならる」。

四〇 どれほどの深い気持を見たいと申しましよう。

四一 「かん也」は「かる也」。

底本「かんや」とあり「ら」を補入する。

ゆかしき物を見せ給へらんに、御心ざしまさりたりとて仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申給へ」と言ふ。「よき事なり」と承けつ。

日暮るゝほど、例の集まりぬ。あるいは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは唱歌をし、あるひはうそぶき、扇を鳴らしなどするに、翁出ていはく、「かたじけなく、きたなげなる所に年月をへて物し給ふ事、極まりたるかしこまり」と申す。「翁の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひ定めて仕ふまつれ」と申もことわり也。「いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしの程は見ゆべし。仕ふまつらん事は、それになむ定むべき」と言へば。これよき事也。人の御恨みもあるまじ」と言ふ。五人の人々も「よき事なり」と言へば、翁入りて言ふ。かぐや姫「石つくりの皇子には、佛の御石の鉢といふ物あり。それをとりてたまへ」と言ふ。「くらもちの皇子には、東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を莖とし、白き玉を實として立てる木あり。それ一枝おりて給はらん」と言ふ。「今ひとりには、唐土にある火

一 「ゆかし」は、見たい、知りたいの意。「見せ給へらん人」の意。

二 底本「御心ざしのまさり」。

三 笛、琴などの譜を吟ずること。

四 歌などを声ひくく誦すること。

五 この上ない恐れ入ったこと(でございます)。

六 (御厚志に感激しますの)「……」と私が申すのも道理です。

七 古本、以下「さためかたし、ゆかしくおもひ侍るもの」侍を見せ給はむに御心さしのほど……とある。

この氣持を補って解さねばならない。

八 姫が言いますのでな。

九 釈迦成道の時、四天王の奉った石鉢があり、その

仏鉢が西域になお存し、青紺または黒の光沢ありと伝

える。↓補注七

一〇 シナの伝説中、渤海の

鼠^{ねずみ}のかはぎぬを給へ。大伴の大納言には、龍^{たつ}の頸^{くび}に五色^{ごしき}に光^ひる玉^{たま}あり、それをと^とりて給へ。いそのかみの中納言には、燕^{つばくらめ}の持^もたる子安^{こやす}の^(ひ)かいひとつとりて給^{たま}へ」と言^いふ。翁^{おきな}、「かたき事どもにこそあなれ。この國にある物にもあらず。かくかたき事をば、いかに申^{まう}さむ」と言^いふ。かぐや姫、「何か、かたからん」と言^いへば、翁^{おきな}、「とまれかくまれ申^{まう}さむ」とて、出^いて、「かくなむ。聞^{きこ}ゆるやうに見^みせ給^{たま}へ」と言^いへば、御^み達^{たち}・上^{かみ}達^{たち}部^べ聞^ききて、「おいらかに、あたりよりだにな^{あり}歩きそ、とやはのたまはぬ」と言^いひて、倦^うんじて皆^{みな}歸^{かへ}りぬ。

三 佛の御石の鉢（石つくりの皇子の話）

猶、この女見^みでは、世にあるまじき心地^ちのしければ、「天竺^{てんし}にある物ももて來^こぬ物かは」と思^{おも}ひめぐらして、石つくりの皇子^{みこ}は、心のしたくある人にて、「天竺^{てんし}に二（つ）となき鉢^{はち}を、百千萬里^{へばんり}の程^{ほど}行^ゆきたりとも、いか

- 東にあるという五山の一で、仙人が住むという。
 二 火鼠の毛で作った衣↓補注八
 三 莊子雜篇に「夫れ千金之珠は必ず九重の淵に驪龍の領下に在り」とある。
 三二 二、三寸の大ききで黒褐色、斑紋があり、形の聯想から安産の守りにする。
 三四 どうして申せましよう。
 三五 「かくなん申し侍る」の略。
 三六 底本「いひ給へ」。古本による。
 三七 位は三位以上、官は大・臣・大中納言・參議の人をいう。あべのみむらじ以下三人を指す。
 三八 いっそあつさりと、「家の付近だけでもぶらぶらするな」とおっしゃらないものか（そう言われた方が諦めがつく）。底本「あたりよたに……」。
 三九 将来のための心の用意。支度。